

【日文研究室だより】

文学部の改革に伴って日本文学専攻は二〇一一年度から日本文学研究学域と名称を換え、日本文学専攻と日本文学情報学専攻の二専攻を擁することとなった。日本文学専攻は文学を中心に、文化や歴史、社会など広汎な領域に互る人間の文学的営為を研究し、新しくできた日本文学情報学専攻では、図書館情報学、日本語学、文化情報学の三本の柱をたて、日本文学や日本語に関する知識を深め、同時にデジタル・アーカイブなど情報整理方法の習得を目指す。どちらの専攻もこれまで日本文学専攻で培った蓄積を一層に発展させていくことを目的に、そのコンセプトが構築されたのは言うまでもない。

初めての年である昨年には一三七名の新入生を迎えた。二回生時に各専攻への所属を決めるために、一回生はこれまでと違って研究入門やリテラシー入門などの基礎訓練ともいうべき内容を広汎に勉強した。その結果、日本文学専攻に八〇名、日本文学情報学専攻に五七名が分かれ、それぞれの専門を学んでいくこととなった。とはいってもの、大きな括りとしての日本文学研究学域にとって、この二つの専攻はどちらも日本文学・文化研究にははずせ

ない重要な学問内容であり、相互に繋がりあいながら今後、新しい日本文学研究のシステムを作り上げていくことになると思う。こうも認められ、今年度も多くの志願者を得、一八九名の新入生が入学することとなった。変革というものはいつも何らかの矛盾をもたらしつつ、一方に新しい価値の発見を見出しつつ、これまでに一年次ですぐに専門教育に入っていたカリキュラムは改訂され、いわば基礎的な学問への態度が教授されるのが中心となった。すぐに専門にはいりたいと思う学生もいるかとは思いますが、一方に一年間こうして学問そのものの価値を相対的に学んでいくことのメリットは多かつたように一年を終えてみて痛感している。これからこの立命館からどのような斬新で画期的な研究が出現していくかが楽しみである。

二〇一一年度をもって中西健治先生がご退職となった。中西先生は中古文、特に『浜松中納言物語』研究の第一人者であるが、二〇〇四年に本学にご着任され、以後専攻の柱として数々のお仕事を日本文学専攻に残された。特に文学部改革の渦中では、専攻主任として大変なご苦労をかけた。さやかながら先生のご業績を称える退職記

念論集を『立命館文学』から刊行、また本年一月一六日には最終講義を文学部主催で清心館にて挙行した。学生、教員、教員など二〇〇名を越える人々が参集し、盛会のうちに終了した。これも先生の個人柄によるものである。

もう一人村田裕和先生がご退職となった。先生は二〇〇八年に助教としてご赴任され、専攻教育に大きなご尽力をされたが、ほかに本学会の様々な事務を担われ、その組織の新しい方向についても多くのお仕事を残された。本年度から北海道教育大学旭川校にご転出された。ますますのご活躍をお祈りしたい。

本年度から川崎佐知子先生がご赴任された。中古文、特に『狭衣物語』研究で著名な研究者である。学域として本学会のこれからの力を与えてくださることを思う。

このたよりを書くことで学協会長の仕事を終わることとなる。というものの二〇一一年度には在外研究、ほとんど帰ってすぐの会長職で、ほとんど学域の諸先生方、専攻TA、大学院生、卒業生の皆さまのお助けをいただきながらの一年であった。記して感謝申し上げます。

(中川成美)